

コーディネーター 中村俊彦

1954年福岡県生まれ。農学博士（東京大学）。現在、千葉県立中央博物館生態・環境研究部長、千葉大学大学院客員助教授。ちば・谷津田フォーラム代表、東京湾学会副会長。

専門は植物生態学、景相生態学。自然環境の保全、復元に関する研究をおこなうとともに、自然保護や環境教育の活動に参加する。

著作に「湾岸都市の生態系と自然保護（信山社サイテック、共編著）」、「都市につくる自然（信山社、共編著）」、「新校庭の雑草（全農教、共著）」、「校庭のコケ（全農教、共著）」、「ネイチャーサイエンス：連載、里やま自然誌1～10（角川書店）」ほか。

## 「千葉の自然と里やま」

### 1. 極めて恵まれた千葉の自然環境

三方を海に囲まれた房総半島の千葉県であるが、沖合では暖流の黒潮と寒流の親潮とがぶつかり、世界最北限の造礁サンゴが生息するとともに、その海を北からの使者サケが上る。陸域では、暖温帯の照葉樹林と冷温帯の落葉樹林とが混在する多様な森林植生を有する。このように千葉県は、海、陸ともに南方系と北方系の動植物、両方が出会う、極めて生物相豊かなところである。

房総半島の南部はおもに丘陵地形であるが、北部では、下総台地に小河川が毛細血管のように張りめぐらされる谷津地形が卓越する。この谷津は水に恵まれ、周辺は豊かで安定した自然環境が存在する。千葉での人々の歴史は今から約3万年前の旧石器時代に遡るが、この恵まれた谷津を中心に、縄文、弥生の時代から現在に至るまで、他に類例をみないほど連続かつ高密度の人口を有している。

### 2. 里やま(里山)とは

里山とは、元々、農用林など人里近くの森や林のことで、薪や堆肥づくりのための落ち葉、また山菜などを得るために、人がつくり管理されてきたところである。ただ、最近では、この森や林だけでなく田畑や川沼、さらに集落までも含む農村の自然環境全体をさす言葉として用いられてきている。いわば、人々の伝統的生活がつくり出した様々な土地モザイクのセット、それが「里やま(里山)」である。

昭和28年まで千葉にはトキがいた。ドジョウやタニシを餌とし、雑木林で子育てするトキはまさに田んぼと森林のセットで生きる里やまの鳥である。

### 3. 里やまの素晴らしさ

人々は里やまから食料や燃料をはじめ様々な恵みを得てきた。しかし、それは決して自然を壊したり、疲弊させるものではなかった。むしろ、人とかかわりは多様かつ連続的な自然・生命のつながりを育んだ。このような里やまは、多くの動植物の生息・生育環境であるとともに、そこでの物質・エネルギーの循環が水や空気を浄化する、自立し持続可能な生態系を備えた空間だったのである。

里やまにはいろいろな行事や祭りがあり、人と自然が調和・共存した豊かな文化が培われてきた。日本人にとって、里やまは生活・生業の場であるとともに、なつかしい原風景の場であり、さらに子供たちにとっては、自然や文化を学びながらその感性を高め、自然観・生命観を育むところである。

### 4. 里やまの現状と将来

金融経済中心の日本では、都市化や産業構造のグローバル化に加え、農業の近代化やゴミ投棄等、里やまには様々な問題にさらされその変貌が著しい。

人と自然と文化とが調和・共存する里やまは、全ての日本人にとって大きな価値を有する貴重な財産である。この里やまを、子供たちや将来の人々のためにも、みんなで力を合わせ、守り、かつてトキのいた里やまをよみがえらせることは、今の私たち大人の責務である。